

年祝い

○表白 例①

本日ここに ○○○○殿の○○（還暦等）を迎えるにあたり
有縁の同朋あい集い 謹んで尊前を荘厳し 懇ろに聖教を誦誦し
この法縁を祝す

憶うに人身を受くるは極めて稀なり

しこうして（それに加え）人の世は荒波の航海のごとくなり

宗祖親鸞聖人は 人生を「難度海」にたとえられけり

そもそも釈尊に始まり七高僧を経て

宗祖親鸞聖人に伝えられし本願念仏の教えに遇うことは

あたかも大海のとまり木にたどり着くかのごとき奇跡なり

数限りなき有縁に恵まれ この記念すべき日を迎えしことは

まことに弥陀の本願に照らされし上のことなり

しかれどもこれを以て 人生の大成にはあらず

教えをたずぬる道に終わりなく いままさに新たな航海の機縁といえり

まさに願わくはこの法縁に遇いて いよいよ深く真実のみ教えに遇い 本願念

仏の道を歩まんことを願わん

○○○○年 ○○○月 ○○○日

○○寺住職 釈○○ 敬って申す

年祝い

○お祝いのことば 例①

本日は〇〇さんの〇〇（還暦等）をお迎えなされるにあたって法要をお勤めできましましたこと、大変おめでとうございます。

今日はとてもお天気も良く、お祝いにふさわしい日となり喜ばしく思います。（今日はいにくの雨模様となりました。人生晴れの日ばかりではなく雨の日もあり、それはそれでこれまでの歩みをじっくり振り返るかけがえのない時間といえましょう。）

これまでの人生を振り返えられるとき、それはまるで大海原の航海のようなもので、決して穏やかな海だけでなく、時に荒波に揉まれて沈みかけたこともあったかも知れません。

宗祖親鸞聖人は人生を「難度海」（渡りがたい海）を航海するようなものと表現されています。人生を荒波にたとえたもので、翻弄されながらもようやく〇〇（還暦等）にたどりつかれたこと自体、ほんとうに奇跡といえるのかも知れません。長い航海を経験されてきて、いまようやくひとつの大きな止まり木、念仏の教えにたどり着いたといえましょう。

そしてこれから新たな歩みの一步をふみ出されるにあたり、この法要が宗祖の教えを確かめる大事な機縁となり、これからますます本願念仏の教えを歩まれますことを願っております。

本日は本当におめでとうございました。

年祝い

○表白 例②

敬って大慈大悲の阿弥陀如来の御前

ならびに浄土真宗の宗祖親鸞聖人に白して申さく

本日ここに 恭しく尊前と祖師前を荘厳し 有縁参集のもと ご家族と共に

○○○○（名前）さんの○○（還暦等）の年祝いを修したてまつる

それおもんみれば

○○○○さんは ○○（元号）年○○月○○日に○○○○の地に生を享け

○○（お連れ合い）さんと出逢い結婚の志を立て ○○（お子さん）さんを受かる

それよりこのかた 日々の生活のただ中であって 苦楽ありとも 家族一同手を取り合い 共に語り共に過ごす

また縁あつて数多くの人々に出会い 互いに支い合い 本日にいたる

宗祖親鸞聖人 和讃にいわく

生死の苦海ほとりなし

ひさしくしずめるわれらをば 弥陀弘誓のふねのみぞ のせてかならずわたしける と

まことにこれ生死の苦海の中において大慈大悲のお育てにあい

御年○○歳まで人生を重ねらるる 今日より後 さらに家族あいたずさえて如来大悲の恩徳を仰ぎつつ 宗祖親鸞聖人の教法を聞思し 人生荘嚴のまことを尽くさんことを

○○○○年 ○○月 ○○日

○○寺住職 釋○○○ 敬って申す

年祝い

○お祝いの言葉 例②

本日は○○○○さんの○○（還暦等）の年祝いをお勤めいたしました。誠におめでとうございます。仏事として年祝いをお勤めすることは、○○○○さんの○（還暦等）を縁にして、ご家族が南無阿弥陀仏のおいわれを聴聞し、自らの人生を振り返る事が出来る重要な機縁であると思うのです。

私たちは自分の人生を自分の思い通りに生きたいという思いが止めどなく湧いてはきます。しかし現実には、自分の思い通りの楽しみや喜びばかりではなく、苦しみや悲しみも多いものです。そしてそれを抱えながら歩む事は難しいことです。若さや健康をどれだけ望んでもそれが叶わないこともあります。若さ健康だけが人生でないことを、私たちはどこかで感じ取ってまいりましょう。年を加えてきたからこそ知れるこの身の事実に出会うことがあります。

この身を通して、この身とともに歩んで行く事が出来る道があります。どうか、親鸞聖人の教えを通して人生に出会い直す機縁となることを念じております。

年祝い

○表白 例③

本日ここに〇〇さん 〇〇歳となり
〇〇（還暦等）を迎えるにあたり
阿弥陀如来様の尊前で御祝いの法会を営みます

お釈迦さまは この世に常なるものではなく
日々刻々に移り変わると説かれました
そして 蓮如さまは 御文で人のいのちを

朝には紅顔ありて夕べには白骨あした こうがんとなれる身なり
と示されます

その理ことわりのとおり

次第に耳目じもくの衰えなどの中にありつつも

〇〇歳の年を迎えられしこと
まことに不可思議なご縁であります
今までの有縁の厚情におもいを致し
念仏の教えとの縁を
いよいよ大切に過さんことを

〇〇〇〇年 〇〇月 〇〇日
〇〇寺住職 釈〇〇 敬って申す

年祝い

○お祝いの言葉 例③

本日は〇〇さん 〇〇歳となり、年祝いにあたり、お参りいただきありがとうございます。

お寺での年祝いは、私たちがこの世に生まれ、年を重ねてきた中で、有縁の方々の慈愛に育てられてきたことを確認し、遇い難き仏法僧に遇い得た喜びとともに、これからの人生をどのように過ごしていくのかを、たずねていくという意味があります。

いのちそのものは、遠く過去から、はるか未来への繋がりの中にあります。その中でありながら、私たちは自我に埋没し、煩惱のただ中であって、その繋がりを忘れて生きております。

思い通りになることも、思い通りにならないこともあるわけですが、いま現在このようにある私のいのちの事実には、年を重ねてきたからこそ知れることもあります。そのことを通して、人生に丁寧に向き合って生きることが願われているのではないのでしょうか。

平穏な日々だけではなかったかもしれませんが、阿弥陀さまとのご縁をいただいたこの場所を大切にして、これからも阿弥陀さまの呼び声を聞くこと（聞法）と、そして南無阿弥陀仏を称える（称名念仏）生活を切に願ひ、お祝いの言葉とします。

今日は、ようこそ皆様でお参りくださいまして、大変ありがとうございます。

年祝い

○表白 例④

本日ここに ○○さんの○○（還暦等）のお祝いにあたり 今 ここにある「いのち」に思いをいたし 過去・現在・未来を通して我々を照らし続けてくださっている阿弥陀さまのおはたらきの深さに感謝いたします

一、この度のこのご縁は はじまり 初事と思うべし

一、この度のこのご縁は われひとり 我一人の為と思うべし

一、この度のこのご縁は こころ 今生最後と思うべし

と真宗門徒が大切にしてきた聴聞の心得があります

年を重ねるたびに新鮮な気持ちを使い 自分自身を善しとして 悩みや苦しみから目をそらし 明日は必ず来ると 毎日を生きていますが 私生きる時間は 限られています

そのような人間に 今の一瞬を大事に 誰も代わることのできない私として 毎日を精一杯生きよ といつでもどこでも誰に対しても阿弥陀さまは呼びかけられています

願わくは 阿弥陀さまからの呼びかけに向き合い 人として生まれたことを受け止められる人生を歩まんことを

○○○○年○月○日

○○寺住職 釋○○ 敬って申しあげます

年祝い

○お祝いの言葉 例④

そもそも長寿をお祝いするようになったのは、奈良時代に貴族の間で始まり、その風習が一般民衆に広まったのは室町時代から江戸時代だと考えられています。

年祝いというと、「還暦(満六十歳)」、「古希(七十歳)」、「喜寿(七十七歳)」、「傘寿(八十歳)」、「米寿(八十八歳)」、「卒寿(九十歳)」、「白寿(九十九歳)」、「百寿(百歳)」など、長寿の節目として、感謝の気持ちと、いつまでも長生きしてほしいことを願うお祝いとして定着しています。

年を重ね、今日まで生きてこられたことは、多くの方々の支えがあつてこそのことであり、本当にありがたいことです。その反面、これまでできたことができなくなったり、病気が見つかったり、自分の思い通りにならないことがあることを、実際に自分の身をもって感じるようになってきたのではないのでしょうか。

自分の思い通りにならない老いや病、そして死の前では、これまで蓄えてきた知識や経験、そしてお金や地位や名譽は役に立たないのです。自分の身に起こった事実を通して、これまで頼りとしてきたものが、本当は頼りにならないものを頼りとしてきたことに気づかされるのです。

「私たちは、生きることなく、ただ、生きる準備ばかりしている」(ブレーズ・パスカル、フランスの哲学者)という言葉があります。

この世に誕生し、生きるということとは、どういうことなのでしょう？ 本日のご縁を機会に、人として生まれてきたことを、老・病・死する我が身を通して本当に受け止められているのかということ問い直す歩みを始めていただければと思います。

短い時間ではありましたが、お祝いの言葉とさせていただきます。本日は、お参りいただき、ありがとうございます。そして、あらためて新たな人生のスタートにお祝い申し上げます。